



大自在

「津波てんでんこ」。地震があれば津波が来る。たとえ夫婦や親子でも自分以外は気にせず、てんでばらばらに逃げろ。こんな言い伝えが県民にも広く知られるようになったのは東日本大震災がきっかけだった▼1896年の明治三陸大津波。2万を超える命をのみ込んだ大災害を教訓に、東北各地で伝えられてきた。だが、6年前、その実践には地域や個人で差があった▼3千人の小中学生が率先して避難した岩手県釜石市でも、市全体の死者・行方不明者は千人を超えた。祖父母、父母らから「てんでんこ」を教えられた人の中にも、家族の安否を気にして犠牲になった人がいる。整備が進んだ防潮堤や被害予測を「過信」した人もいた▼「知識として分かっていること」と「実際に行動に移すこと」。二つの間には落差がある。誰もが知っていよう。実践「する」か「しない」かが時には生死を分けることも、過去の大災害に学んできたはずだ▼震災前から釜石市の防災教育に携わってきた片田敏孝群馬大教授は、それでも「行動に移せない」のが人間の「素」だと指摘する。防災の第一歩は「避難しよう」としない「自分を知ること。その上で、それを押して行動に移ることができる理性」をどう獲得するかだと説く(集英社新書「人が死なない防災」)▼県内の沿岸自治体の多くでできるよう津波避難訓練が行われる。「行動に移せる」。自分になるために主体的に取り組みたい。所用があつて参加できなくても落胆は無用だ。行政が用意する機会に限らずとも、いつでも訓練はできるのだから。

2017.3.12

2017年3月12日 朝刊

①「津波てんでんこ」とは、どういう意味でしょうか。

[]

②訓練の大切さを「行動」の言葉を使って説明しましょう。

[]

③あなたが、大規模災害にそなえるために取り組みたいことを書きましょう。

[]

年 組 名前